

廣報

東京大学理学部

合成関数の高階導関数

```

6 th derivatives
0 0 0 0 0 0 1
Q(1)= 1 deg= 1
0 0 2 0 0 0
Q(2)= 10 deg= 2
0 1 0 1 0 0
Q(3)= 15 deg= 2
0 3 0 0 0 0
Q(4)= 15 deg= 3
1 0 0 0 1 0
Q(5)= 6 deg= 2
1 1 1 0 0 0
Q(6)= 60 deg= 3
2 0 0 1 0 0
Q(7)= 15 deg= 3
2 2 0 0 0 0
Q(8)= 45 deg= 4
3 0 1 0 0 0
Q(9)= 20 deg= 4
4 1 0 0 0 0
Q(10)= 15 deg= 5
6 0 0 0 0 0
Q(11)= 1 deg= 6
00:00:46
7 th derivatives
0 0 0 0 0 0 1
Q(1)= 1 deg= 1
0 0 1 1 0 0 0
Q(2)= 35 deg= 2
0 1 0 0 1 0 0
Q(3)= 21 deg= 2
0 2 1 0 0 0 0
Q(4)= 105 deg= 3
1 0 0 0 0 1 0
Q(5)= 7 deg= 2
1 0 2 0 0 0 0
Q(6)= 70 deg= 3
1 1 0 1 0 0 0
Q(7)= 105 deg= 3
1 3 0 0 0 0 0
Q(8)= 105 deg= 4
2 0 0 0 1 0 0
Q(9)= 21 deg= 3
2 1 1 0 0 0 0
Q(10)= 210 deg= 4
3 0 0 1 0 0 0
Q(11)= 35 deg= 4
3 2 0 0 0 0 0
Q(12)= 105 deg= 5
4 0 1 0 0 0 0
Q(13)= 35 deg= 5
5 1 0 0 0 0 0
Q(14)= 21 deg= 6
7 0 0 0 0 0 0
Q(15)= 1 deg= 7
00:01:14
    
```

```

8 th derivatives
0 0 0 0 0 0 0 1
Q(1)= 1 deg= 1
0 0 0 2 0 0 0 0
Q(2)= 35 deg= 2
0 0 1 0 1 0 0 0
Q(3)= 56 deg= 2
0 1 0 0 0 1 0 0
Q(4)= 28 deg= 2
0 1 2 0 0 0 0 0
Q(5)= 280 deg= 3
0 2 0 1 0 0 0 0
Q(6)= 210 deg= 3
0 4 0 0 0 0 0 0
Q(7)= 105 deg= 4
1 0 0 0 0 0 1 0
Q(8)= 8 deg= 2
1 0 1 1 0 0 0 0
Q(9)= 280 deg= 3
1 1 0 0 1 0 0 0
Q(10)= 168 deg= 3
1 2 1 0 0 0 0 0
Q(11)= 840 deg= 4
2 0 0 0 0 1 0 0
Q(12)= 28 deg= 3
2 0 2 0 0 0 0 0
Q(13)= 280 deg= 4
2 1 0 1 0 0 0 0
Q(14)= 420 deg= 4
2 3 0 0 0 0 0 0
Q(15)= 420 deg= 5
3 0 0 0 1 0 0 0
Q(16)= 56 deg= 4
3 1 1 0 0 0 0 0
Q(17)= 560 deg= 5
4 0 0 1 0 0 0 0
Q(18)= 70 deg= 5
4 2 0 0 0 0 0 0
Q(19)= 210 deg= 6
5 0 1 0 0 0 0 0
Q(20)= 56 deg= 6
6 1 0 0 0 0 0 0
Q(21)= 28 deg= 7
8 0 0 0 0 0 0 0
Q(22)= 1 deg= 8
00:02:02
    
```

目次

| |
|-----------------------------|
| 文化功勞者となられた森野米三先生 ……朽津耕三 ……2 |
| キャニオンランド印象記 ……4 |
| 理学部図書掛の現状と要望 |
| 理学部図書職員一同 ……7 |
| 〈学部消息〉 ……8 |

合成関数の高階導関数（表紙の説明）

前号と同じく初等的な話をのべる。 $y = f(x)$, $F = g(y)$ とおくと、 F の x としての導関数を順次求める。

$$F'(x) = g' \cdot f'$$

$$F''(x) = g''(f')^2 + g' \cdot f''$$

$$F'''(x) = g'''(f')^3 + 3g'' \cdot f' \cdot f'' + g' \cdot f'''$$

$$F^{(IV)}(x) = g^{(IV)}(f')^4 + \dots \quad \text{等}$$

このとき、 n 階の導関数の公式をつくるのも簡単なことで、微積分のつくられた頃、既に得られていたという。解析概論（高木著）の問題にもとりあげられていたから試みられた方も多いであろう。

合成関数の微分と言わなくても、高次対称微分の基本演算からも同じ式が自然にえられ、この立場に立つと、 n 階の場合の公式が極めて簡単に導かれる。

数学の立場からは一般の公式は有用で、対称群の表現論とも関連して面白いが具体的な数値を手で数多く求めるのは無意味な上に、大変面倒である。

しかし、時代は移り、今のようにパソコンが普及してくると、手計算では考えもつかないことが容易にできる。10階位迄なら数分の後に出てくる。御笑覧のために、6, 7, 8階の場合を計算時間つきで表紙にのせる。プログラムが、せこく、ださいことは言う迄もない。1回使えば終りのプログラムだから、笑って見すごしていただければ幸いという所。

表の見方

$$0 \ 1 \ 0 \ 1 \ 0 \ 0$$

$$Q(3) = 15 \quad \text{deg} = 2$$

は、 $15g'' \cdot f'' \cdot f^{(IV)}$ 又は $15g'' d^2 y \ d^4 y$

の意味。同様に、

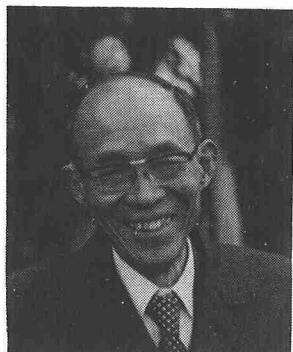
$$0 \ 1 \ 2 \ 0 \ 0 \ 0 \ 0$$

$$Q(5) = 280 \quad \text{deg} = 3$$

は、 $280g''' \cdot f'' \cdot (f''')^2$ 又は $280g''' d^2 y (d^3 y)^2$

の意味である。

文化功労者となられた森野米三先生



理学部名誉教授の森野米三先生は、このたび文化功労者の栄誉を受けられた。新聞による

と、構造化学分子科学の基礎を確立された功績がその主要な理由とされている。化学教室で先生の教えを受けた私たちの喜びは大きい。先生の御略歴とお人柄については、広報の1巻5号4ページ(1969)に記されている。

森野先生は1908年に大阪に生まれ、高校まで大阪で過ごされた。高校で片山正夫先生の“化学本論”に感激し、師を慕って東大入学を決意されたという。この本は熱力学に基いて化学を体系化したものである。森野先生の化学統計力学の名講義

(Fowler-Guggenheim の Statistical Thermodynamics の影響が濃かった)を聴いた学生たちは、先生が青年時代に愛読されたという熱力学と統計力学が先生の学風の基礎にあることを思った。

学位論文は片山研究室での表面張力の研究であったが、まもなくラマン効果の研究を始められた。これは水島三一郎先生の協力者として分子内回転を分光学的に解明しようという当時まったく新しい研究であった。(先生が発表された初期の論文のタイトルには、“Free Rotation” という言葉がみられる。エタンのC-C結合軸のまわりで二つのメチル基の回転が自由でないことはわかりかけていたが、そのポテンシャルがどのような形をしているのかについてはほとんど知られていない時代であった。水島・森野らのラマン効果などによる研究は、この問題の解決に大きな役割を果た

朽津耕三(化学)

した。) 現在とちがって市販の分光器がなく、分光器を何台も手作りされ、水銀線によるラマン線を長時間かけて撮影する重労働が続いた。その中から世界的発見が生まれた。1,2-ジクロロエタンにトランス・ゴーシュ回転異性体が存在することの発見である。これは構造化学を作り変えるほどの影響を与えた。

森野先生はゴーシュ型がどんな形なのかをさらに調べるために電子回折の研究を始められた。

1943年に名大に赴任されたとき、物理教室の上田良二先生の協力で実験装置第1号が動き出し、そのち東大に帰られてからも新しい装置で電子回折の研究がずっと続けられた。先生は回転スペクトルの研究に強い興味を持っておられたが、1956年にアメリカ出張から帰られた頃からマイクロ波分光の研究を始められた。それには物理教室の霜田光一先生の強い支援と協力があった。さらに赤外分光や核四極子共鳴の研究も進められた。

これらの研究の中心テーマは、多原子分子の幾何学的構造と分子内ポテンシャル定数を正確に決めることであった。その方法論を確立し、それを用いて分子構造定数をできるだけ正確に求めるために、研究室員の活発な討論と実験が日夜続けられた。研究の面白さでもあり難しさでもあったのは、構造に対する分子振動の影響であった。CO₂分子の例をあげよう。この分子は直線形なので、C-O結合の長さを測って2倍するとO-Oの長さになる筈であるが、実測してみると2倍より少し短い。森野先生はそれを分子の折れ曲り振動の効果として説明された。分子がどのように曲っても三角形が出来るので、O-OはC-Oの和よりも短い。測定している長さはあらゆる振動にわた

る平均であるから、上記の結果となる。この現象にはMorinoの名がつけられている（イタリア系の人だと思ったという外国人もいる）。岡武史教授（現在シカゴ大学）と共同で発表された平面分子の慣性欠損の研究も著名である。マイクロ波分光による非直線XY₂型分子の平衡構造と非調和ポテンシャル定数の決定、二原子ラジカルの構造定数の決定もハイライトの一つであった。これは広田栄治教授（現在分子研）らの協力でなしとげられたものである。これらの成果は、化学はもちろん量子エレクトロニクス、電波天文学、大気環境科学などにも大きく貢献している。

森野先生の研究方針の特色は次のようなものだったと思われる。まず実験装置のほとんどを自作し、改良を重ねながら測定に用いたことである。物理学の最先端の実験技術を化学の研究に取入れようという意欲の表れであった。その点で上記の上田・霜田両教授をはじめ多勢の物理学者の惜しめない協力が得られたことは、先生にとって幸運であった。また測定データを解析するための理論的基盤を明確にすることを目指して努力が続けられた。上記のように分子振動の効果を解明できたのもこのためである。1955年ごろ分光法と回折法の精度が向上してきたとき、両方から求めた結果に矛盾のあることが話題となっていた。森野先生はミンガン大学のBrockway教授からこのことを聞かれ、基準振動に基く計算をされて、その矛盾は測っている平均値の内容が違うためであるという解答を与えられた。これが契機となって、森野研究室では分光法と回折法の併用解析という技術が発展した。このように“両刀”を使える研究室は、そのころ世界でただ一つであった。森野先生はこのような業績によって、1964年に日本学士院賞、1973年に藤原賞を受けられた。

先生の研究に対するひたむきな情熱を物語るエピソードは多い。その一端をここに述べるよりも、理学部広報（7巻12号3ページ、1976年）に掲載された先生の小文“新幹線から赤富士を眺める”を一読されることを薦めたい。まず目標を設定し、自然の状況と人間の条件を慎重に検討した上で果敢に実行に移される先生の研究の進め方がそのまま現れた物語である。そこにも語られているように、先生は山の自然が何よりもお好きである。山歩きは先生の高校時代以来の最大の楽しみの一つであり、現在でもしばしば高い山に行かれる。座談でも山のお話が出てくると特に面白く、とどまる所を知らないほどである。

先生は昔から計算尺と計算器（当時は手回し型）がお好きであったが、1955年の滞米中に電算機を実際に使用されて、いかに有用であるかを体験された。帰国されてから、先生は東大に高速計算機を整備する計画の発起人の一人として活動された。高橋・後藤両先生のPC2計算機による理学部計算センターの創設（1958）を経て大型計算機センターの創設（1966）にいたる過程には、先生の並々ならない粘り強い御努力があった。

先生は相模中央化学研究所所長として長い間多忙な日々を送っておられたが、最近になって多少の暇を得て、三原子分子のポテンシャル定数の計算などを楽しんでおられる。分子構造総合討論会で自ら発表され、またいつも会場の最前列で熱心に討論に参加されている。そのような機会には、戦中戦後の辛酸を切抜けながら全心全霊をこめて育て見守ってこられた日本の構造化学が今日の隆盛をみたことについて、無量の感慨をお持ちのことであろう。このたびの御受賞を心からお祝い申し上げ、今後ますます御研究と山歩きをお楽しみになるようお祈り申しあげます。

キャニオンランド印象記

俣野 博（数学）

本年（1981年）6月、米国ユタ州南東部のキャニオンランド国立公園で、数理生物学のフィールドワークショップが開かれた。会期は5日間、参加者は米国から20名、カナダ、イタリア、日本から各1名の、計23名であった。会場は人里遠く離れた岩山の中の浅い洞穴に設けられ、参加者は付近の岩場にテントを張って寝泊まりし、セミナーを続けた。文字通りの field workshop（野外研究集会）であったわけだ。

ユタ州は、その中央を走るロッキーの支脈を除けば、全体として緑の少い、広大な乾燥地帯である。コロラド、ワイオミング、モンタナ等とともに、オールド・ウェスト（旧西部）と呼ばれる地域に組み入れられる。目覚ましく発展したお隣りの大平洋岸地区（ファー・ウェスト）から取り残され、かつての西部開拓時代の名残りを今だに多くとどめている地域だ。州の北部には、海水の6倍もの高濃度の塩水をたたえたグレート・ソルトレークが広がり、そのほとりに栄える州都ソルトレーク・シティーは、末日聖徒イエスキリスト教会（モルモン教会）の本拠地として名高い。19世紀半ば、一夫多妻を認める異端宗派として迫害を受け、東部を追われたモルモン教徒たちが初めてこの辺境の地を踏んでから1世紀半。彼らのたゆまぬ努力で、かつての不毛の大地に多くの人間が住めるようになり、町は発展した。現在もユタ州、とくにソルトレーク・シティーでは、優に半数以上の人間がモルモン教徒だといわれる。

いくらか発展した北部に対し、州の南部には殆ど手付かずの荒野が広がる。地形的にも、北部とはかなり異なっているようだ。見渡す限り続く砂漠。その砂漠の随所に島のように浮かぶ異様に切

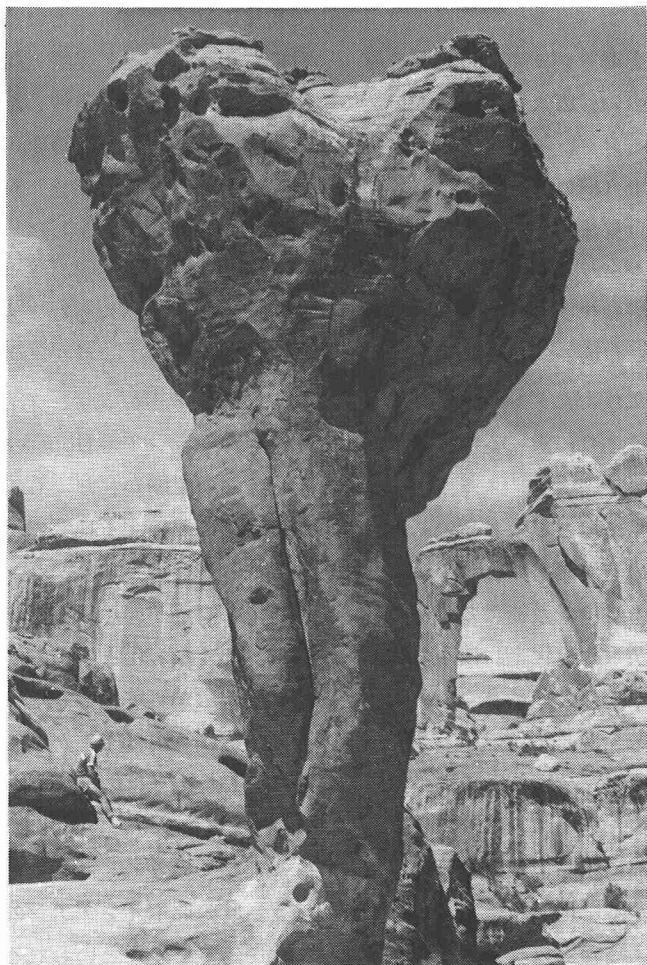
り立ったメーサ（台地）の群れ。地底奥深く口を開けた谷。林立する巨大な石柱群。天空に懸かる荘大な岩のアーチ。これらの驚異的な造形のひとつひとつが、悠久の昔からの人智を超えた大自然の力によって生み出されてきた。その無言の威容は、ここを訪れる者の魂をゆさぶらずにはおかない。私は地質学の専門家でないので詳しいことは知らないが、ユタ南部の荒野は地質学的にも極めて変化に富んだ場所だという話だ。私などの素人目にもそう見える。実際、同じ荒野の中でも、場所ごとに地質、気象条件、造山運動の影響の受け方の違いなどから景観の変化が著しく、ひとたび場所を変えると眼前に全く異質の風景が展開するのに驚かされることがしばしばある。ちなみに、全米41ヶ所の国立公園のうち、5ヶ所がこのユタ南部に集中しているのも、無理からぬことに思われる。

今回のフィールドワークショップは、詳しくはキャニオンランドのUpper Salt Creek Canyonという場所で開かれた。ここはナヴァホ砂岩からなる岩山の連続する地域で、岩の表面はザラザラして丸みをおびており、ゴツゴツした感触はない。それでも高さが50m以上に及ぶ断崖絶壁はザラであり、そんな岩山と岩山の間には灌木におおわれた砂地が広がって、小さな川が流れていたりする。その川も、日中は干上がってしまうことが多い。また、13世紀半ばの隆盛期を最後に、突如この地域から姿を消した、Anasaziインディアンの住居跡も点在している。メキシコの先進文明の影響を受け、当時の北米インディアンの中では比較的進んだ文化を誇っていたといわれる。彼らの住居は、岩の薄片をレンガのように積み上げて、練り土で固

めた壁からできている。外敵の侵入に備えてか、ときに断崖の中腹部の横穴に作られていたりもする。それでも長い年月による自然風化や過去の盗掘のために、遺跡の多くはひどい損傷を受けている。彼らがここで生活を営んでいた当時は、もっと緑が多く農耕も盛んであったそうであるが、今では土地の乾燥が進み、砂にまみれて色あせた灌木の群れが、わずかに往時をしのばせているに過ぎない。我々がここを訪れた6月は、夜間はしのぎやすいが日中は最も苛酷になる季節であり、雲ひとつなく晴れ渡った空から、眩しい太陽の光が乾いた大地の上に容赦なく降り注いでいた。

フィールドワークショップは6月8日から始まった。数学を専門とする私にとって、この「フィ

ールドワークショップ」というのは耳慣れない言葉であった。Field workshop、直訳すれば「野外での研究集会」となる。生物学や社会学でおなじみの“fieldwork”（野外作業、実地調査）に通じる響きもあるのだろう。フィールドワークショップに参加するのは、私にとっては今回が勿論初めての経験だったが、実は他の参加者全員にとっても事情は同じであったようだ。だいたい、数学的な理論分析が中心のこのセミナーの性格からして、これを野外でやらねばならぬ理由は見当たらない。それを敢えて野外で、しかも人里離れた辺ぴな山中でキャンプ生活までしながらやったのは、発起人のFife教授（アリゾナ大学）に、数理生物学という学問のあり方に対する彼なりの深い



きのこ状の奇岩。後方に見えるのはエンジェルアーチ

考えがあったからだ。しかしまた一方で、無類のハイキング好きであるFife教授の個人的趣味が今回のフィールドワークショップ開催の大きな原動力となったことも否めないだろう。彼の呼びかけに応じて方々からテントと重い荷物を背負って集ってきた参加者たちも、考えてみれば物好きな連中ではある。とは言え、参加者それぞれが、それぞれなりに、Fife教授の考え方に共鳴できるものを持っていればこそ、こうして集ってこれたのである。

セミナーは、天然の大ホールとも言うべき巨大な浅い洞穴で行われた。洞穴といっても、岩壁の上部にひさしが付いている程度のもを想像していただければよい。とにかくこのひさしのおかげで、日射病の心配もなく快適なセミナーを続けることができた。黒板の代用品として、段ボール板の上に特殊なツルツルの紙を張った急ごしらえのホワイトボードを、枯れ枝のスタンドの上に置いて使用した。これはFife教授の手製で、彼の自称masterpieceである。

講演は午前と夕方に行われた。夕方といっても午後6時から8時までの2時間で、日中はずっとフリータイムである。その時間を利用して、参加者の多くは周辺の山々を各々好き勝手に散策して回った。岩かけを歩いているうちに思いがけずインディアンの遺跡を発見したり、切り立った尾根の上から眼下に巨大な天然の岩のアーチを見つけて小躍りしたりなど、毎日のハイキングは、童心にかえった我々の冒険心を十分に堪能させてくれた。

夕食は午後8時から始まる。夏時間(daylight saving time)を採用しているので、8時でもかなり明るい。食事係としてユタ大学の3名が毎日の夕食の面倒を見てくれた。ただし、食器洗いは全員が交替でやった。一日のスケジュールが終わり、酷暑もおさまったこの夕食時が、最もリラ

ックスできる時間である。食事係のテントの周囲に集った一同のあちこちで、様々な議論に花が咲く。昼間の講演内容を掘り下げた話もあったし、スタンフォード大学のJ.B.Keller教授のように、その博識を生かして毎晩違った興味深い話題を取り上げては熱心に話し込む人もいた。

夕食が済み、時計も9時を回ると、さすがにあたりも暗くなってくる。それでも、ランプの光や月明かりをたよりに、まだあちこちで話が続く。夜も更けてくると、学問的な話題は次第に減り、誰かがうまいリムリック(limerick)を考えて皆を笑わせたりする。リムリックとは、俗な話を題材にした五行戯詩で、1・2・5行と3・4行がそれぞれ韻を踏んでいる。リズムの良さに加えて機知とユーモアが要求され、米国では毎年リムリック大会が催されるなど、なかなか根強い人気があるという。私はKellerを始め何人かのリムリックを聞かせてもらったが、俗語が多いので、悲しいかな解説を聞いて初めて意味がわかるという有り様だった。

皆が銘々のテントに戻り、寝静まる頃、あたりを夜の静寂がつつむ。近くを流れていた小川のせせらぎも、今は沈黙している。日中の暑さで干上がってしまっているのだ。川が流れを取り戻すには、明け方近くまで待たねばならないだろう。その頃我々は深い眠りの中にいる。

最終日、今回のフィールドワークショップについての反省会がもたれた。セミナーのあり方について忌憚のない意見がかわされたが、結局来年も同様の野外セミナーを開くことで合意した。参加者全員にとって初めての試みであったこのフィールドワークショップは、まずは成功だったと言えよう。

理学部図書室の現状と要望

理学部図書室職員一同

東京大学理学部は、東京大学の中で図書掛のない唯一の学部です。この事については、十数年前より掛を置く様に要望していました。しかし、掛のないため、54年の3月迄は、図書登録事務、その他の理学部事務として行わなければならない事務のかなりの部分を総合図書館にお願いして来ました。ところが、54年度より会計上の規則が変わり、総合図書館に依頼できなくなり、現在は登録事務、その他の庶務的事務、及び文部省によるネットワーク（国立大学等間文献複写業務）の複写事務に至るまで理学部事務にお願いしています。

その為、登録事務は用度掛、庶務的なことと複写申込については庶務掛、複写事務の会計的なことは司計掛、という様に理学部事務室に様々なことでお願いすることが増えました。理学部の各図書室のまとめ役として、また東京大学附属図書館の機構（図書行政商議会一幹事会—S系学部部会—学部図書館・室）からいっても図書係はぜひ必要です。古くは、複数の図書職員が居る数学、物理、化学、近年は、全図書室の交代で行ってきたことも、最近の様に図書室業務が複雑多様になりますと、理学部に図書掛がないため、現在、次のような諸問題をかかえています。

(1) 登録事務について

蔵書が飽和状態にある現在では、登録すべきもの、登録しなくてもよいものの判断が必要になってきている。しかも教室の特殊性によって異なるので、各教室の意見を尊重して登録事務をすることが望ましい。

(2) 紀要との交換雑誌の保管場所が一貫しないで、分散している。その為、利用出来ない場合もあり、教室間の意見もまとまっていない。

(3) 理学部宛寄贈図書の配置場所と利用支障。

(例1) 国会図書館発行の新収洋書目録は、理学部中央図書室があれば、そこに配置し共同利用されるべき性質のものであるが、現在1図書室に保管されており、理学部内では所在さえ明らかでない。

(例2) 東京大学の博士論文審査要項は、各学部宛一部のみ発送を行うように変更されたようだが、現在その所在は不明である。

(4) LCカードの検査員

(Library of Congressカード)。

図書目録の機械化に先立って、文部省から各図書室にLCカードが無料で希望枚数配布（理学部への配布枚数は、56年度は約10,000枚となる見込み）される。これらについては、各教室に配布されるごとに検査を行い、この検査書の検査員は、本部の指示により羽鳥が行っている。

(5) カード複写機（理学部全図書室共有：当面、数学図書室設置）の一年間の各教室の利用枚数、消耗品の費用の配分を、現在は数学図書室で行い、移算事務は、理学部司計掛に依頼している。

(6) 現在、理学部内の資料の検索は容易に出来ないが、中央図書室が出来れば、何らかの解決方法を見出すことができ、理学部内の蔵書調整及び資料の有効利用に役立つものと考えられる。

(7) 国立大学等の所蔵している文献の複写については、文部省の指示により、国立大学等文献複写業務規定に基づいて行なわなければならない。その窓口は、学部単位となっているが、何れの図書室も窓口になり得ないので、現在依頼連絡事務は庶務掛が、その移算事務は司計掛が行っ

ている。依頼に関してこのように事務が煩雑な上、複写の受付に関しては総合図書館にゆだね、理学部としては窓口としての義務を果していない。相互利用のためまえからすると、中央図書室が窓口となった依頼と受付を行なうことが望ましい。

(8) 検索性端末機設置については、理学部は附属図書館の中では極めて遅れており、55年度藤原前図書館長時代からの懸案事項である。これについては、理学部は建物が分散している為、各号館に置くのが適当ではないかと、藤原前図書館長及び各教室図書室職員で相談の上、要望書を理学部長宛56年2月6日付で提出している。これは総合図書館として、5年後をメドに今迄の目録業務システム（今は、カードシステムを用いている）を閉じる計画に対応するためのものである。その為、近い将来の機械化にそなえて理学部図書職員が勉強しなければならない状態である。

(9) マイクロリーダーも最近では同時原物大複写

可能な機械が開発されている。この機械購入についても研究する余地が充分ある。

(10) 外国雑誌一括購入委員会・図書館の窓編集委員会・外国雑誌検討委員会・幹事会・自然科学系学部部会・自然科学研究所部会などの委員又は出席なども、各教室としては、複数図書職員が居る所より出すことが多く、こうした事も一貫性に欠け、事務上支障を来している。

(11) 東京大学理学部で発行している紀要は、各図書室が該当分野を所蔵している。外部からの利用などを考慮すると、なおかつ全Sectionが集中保管されていることが望ましい。

以上のような問題点を解決するために、さらに近い将来具体的に検討されるであろう資料の分担収集、業務の機械化、たとえば情報検索、コンピュータによる目録システム等に積極的に取り組んでゆく上にも、中央図書室の設置が切に望まれます。

（文責：羽鳥）

《 学部消息 》

教 授 会 メ モ

9月16日（水）定例教授会

理学部4号館 1320号室

- (1) 前回議事録承認
- (2) 人事異動等報告
- (3) 昭和56年度流動研究員の受入れについて
- (4) 評議員改選について
- (5) 人事委員会報告
- (6) 教務委員会報告
- (7) その他

10月21日（水）定例教授会

理学部4号館 1320号室

- (1) 前回議事録承認
- (2) 人事異動等報告
- (3) 研究生の入学について
- (4) 研究生の期間延長について
- (5) 昭和56年度奨励研究員の受入れについて
- (6) 人事委員会報告
- (7) 会計委員会報告
- (8) 教務委員会報告
- (9) その他

（次回予定：11月18日（水）午後1時30分より）

教室主任会議メモ

9月16日(水) 理学部4号館1320号室

- (1) データ・ターミナル購入について
- (2) その他

行事メモ

9月2日(水) 会計実地検査
(4日(金) 臨海実験所)
17日(木) 組換えDNA委員会
25日(金) 放射線管理委員会
30日(水) 職員一般定期健康診断
(~10月6日(火))
10月8日(木) 給与簿監査準備調査
21日(水) 陸上運動会

22日(木) 中国科学院代表团視察
24日(土) Prof Siv George Porter 博士
(ノーベル化学賞受賞者) 講演会・懇談会
29日(木) 第56回国立9大学理学部長会議・
懇談会
11月9日(月) 組換えDNA委員会
16日~19日 中間子科学国際シンポジウム
21日(土) 理学部関係名誉教授懇談会

◎ 昭和57年度科学研究費補助金の公募について

一試験研究の趣旨などが明確に一

特定研究には、来年度から新たに「情報化社会における言語の標準化」ほか7領域が加わり、これに対し、「原子過程科学の基礎」ほか6領域が本年度で終了することになりました。

公募要領には、研究分担者について、大学などの研究機関に所属する研究者だけでなく、国公立試験研究機関、民間企業などの研究者や日本学術振興会の奨励研究員なども加えることができることが明記された。

また、研究計画調書についての変更点は①研究経費の明細の記入について簡略化を図り、事項ご

とに金額を記入することとし、(ただし、特に必要があると考えられる場合には例示の事項以外の事項を記入しても差し支えない)とした②継続課題の研究計画調書用紙を新たに設けた③特別研究と特定研究の研究計画調書の提出部数を改めた一など。

なお、応募にあたっては、各教室・施設の事務を経由するものとし、種目別提出書類、部数及び期限は次のとおりでありますので遺漏のないよう願います。

| 種 別 | 本部提出期限 | 理学部提出期限 | 提 出 部 数 |
|---|-------------------------------------|---|---|
| がん特別研究 自然災害特別研究 (1) (2) | 56. 11. 14 (土) | 56. 10. 31 (土) | 計 画 調 書 8部 (正1 副7) |
| 特 定 研 究 (1) (2) | | | 計 画 調 書 概 要 (該 当 の 領 域 の み) 3部 (正1 副2) |
| 環 境 科 学 特 別 研 究 | | | 個 人 申 請 票 2部 (正) |
| 核 融 合 特 別 研 究 | | | |
| エ ネ ル ギ ー 特 別 研 究 | | | |
| 綜 合 研 究 (A) (B) | 56. 10. 31 (土) | 56. 10. 31 (土) | 計 画 調 書 8部 (正1 副7) 承 諾 書 (研 究 分 担 者 ご と に) 1部 個 人 申 請 票 2部 (正) |
| 一 般 研 究 (A) (B) (C) | | | ” |
| 奨 励 研 究 (A) | | | ” |
| 試 験 研 究 (1) (2) | | | ” |
| 学 術 定 期 刊 行 物 定 期 的 に 刊 行 す る 二 次 刊 行 物 | 文 部 省 56. 12. 1 (火) ~ 5 日 (土) | 文 部 省 大 学 学 術 局 情 報 図 書 館 課 へ 直 接 | 別 添 公 募 要 項 参 照 |
| 一 般 学 術 図 書 不 定 期 に 刊 行 す る 二 次 刊 行 物 | | | |
| 特 定 学 術 図 書 | | | |
| デ ー タ ベ ー ス 作 成 | | | |

備 考

- 提出期限は厳守のこと。(期限より遅れたものは受けません。)
- 特定研究・一般研究(A)において設備備品費が1品又は1組若しくは1式の価格が1,000万円以上の製品化されていない特注品、設備備品がある場合は提出要領5頁の様式昭和57年度(特定研究)設備備品説明調書を上質B4判の用紙で3部作成のこと。
- 研究代表者又は研究分担者が外国出張・国内出張その他の理由により長期にわたって所属研究機関を離れ研究代表者及び研究分担者の責任を果たせなくなる場合には、原則として研究費は交付されない。
したがって、以上のような事態が予想される研究者は、研究計画をたてる時研究代表者又は研究分担者になることをさけること。
- 総合研究(A)・(B)及び試験研究について、研究費を申請しようとする者で2つないし3つの細目(又は分科)で審査を希望する場合は、研究計画調書はそれぞれ次の部数を提出すること。
 - 2つの細目(又は分科)で審査を希望する場合………11部
 - 3つの細目(又は分科)で審査を希望する場合………14部
総合研究(A)、一般研究(A)・(B)及び試験研究について研究費を申請しようとする者のうち、「広領域」で審査を希望する場合は研究計画書は 11部

◎ 森野米三名誉教授文化功労者に

今年度の文化功労者が、さる10月20日の閣議で
 決定発表され、名誉教授森野米三先生（化学教室、
 73才）が、はえはるご受賞をされました。

ご活躍をお祈り申し上げます。
 なお、顕彰式は11月4日、国立教育会館で行わ
 れました。

心からお祝い申し上げますとともに、ますますの

人 事 異 動

| 所属 | 官職 | 氏 名 | 発令年月日 | 異 動 内 容 | 備 考 |
|-----|-----|----------|-----------|---------|--------------------------|
| 人 類 | 助 手 | 植 田 信太郎 | 56. 7. 1 | 採 用 | |
| 化 学 | 助 手 | 竹 内 英 夫 | 56. 7. 1 | 昇 任 | 東北大・薬学部へ (講師) |
| 物 理 | 助 手 | 清 水 清 孝 | 56. 7. 16 | 採 用 | |
| 天 文 | 助 手 | 尾 中 敬 | 56. 8. 1 | 採 用 | |
| 植 物 | 助 手 | 沓 掛 和 弘 | 56. 8. 16 | 採 用 | |
| 地 質 | 助 手 | 藤 井 敏 嗣 | 56. 9. 1 | 休 職 | 56. 9. 1 ~ 57. 8. 31 |
| 化 学 | 助 手 | 中 田 宗 隆 | 56. 9. 1 | 採 用 | |
| 地 質 | 助 手 | 多 田 隆 治 | 56. 9. 1 | 採 用 | |
| 数 学 | 助 手 | 川 又 雄 二郎 | 56. 9. 1 | 休 職 | 56. 9. 1 ~ 57. 8. 21 |
| 地 質 | 助 手 | 角 和 善 隆 | 56. 9. 1 | 配置換 | 東大・教養学部へ (助手) |
| 物 理 | 助 手 | 藤 田 忍 | 56. 8. 1 | 休 職 | 56. 8. 1 ~ 57. 7. 31 |
| 化 学 | 助 手 | 山 村 剛 士 | 56. 9. 1 | 休 職 | 56. 9. 1 ~ 57. 8. 31 |
| 数 学 | 助 手 | 谷 島 賢 二 | 56. 9. 1 | 休 職 | 56. 9. 1 ~ 57. 8. 31 |
| 物 理 | 助 手 | 池 畑 誠一郎 | 56. 9. 1 | 復 職 | |
| 物 理 | 助 手 | 天 埜 堯 義 | 56. 9. 15 | 休 職 | 56. 9. 15 ~ 57. 9. 14 |
| 人 類 | 助教授 | 西 田 利 貞 | 56. 8. 16 | 昇 任 | 理学部講師より |
| 植 物 | 助 手 | 和 田 正 三 | 56. 9. 30 | 辞 職 | |
| 地物研 | 助 手 | 岩 上 直 幹 | 56. 10. 1 | 採 用 | |
| 地物研 | 助 手 | 山 本 隆 | 56. 10. 1 | 採 用 | |
| 地物研 | 助 手 | 三 浦 彰 | 56. 10. 1 | 休 職 | 56. 10. 1 ~ 57. 8. 31 |
| 数 学 | 助教授 | 大 島 利 雄 | 56. 10. 1 | 配置換 | 東大・教養学部より (助教授) |

| 所属 | 官職 | 氏名 | 発令年月日 | 異動内容 | 備考 |
|----|-------|--------|------------|-------|--------------------------------|
| 数学 | 講師 | 堀川 颯二 | 56. 10. 1 | 昇任 | 東大・教養学部へ (助教授) |
| 物理 | 教授 | 猪木 慶治 | 56. 10. 16 | 昇任 | 理学部助教授より |
| 人類 | | 平井 百樹 | 56. 10. 1 | 講師に併任 | 本務：放射医学 総合研究所 |
| 事務 | 事務官 | 大塚 磐子 | 56. 7. 1 | 昇任 | 経理部経理課給与 第三掛主任に |
| 事務 | 経理掛主任 | 松原 嘉彦 | 56. 7. 1 | 昇任 | 海洋研究所附属大 植臨海研究センタ ー事務主任に |
| 事務 | 経理掛主任 | 青木 道子 | 56. 7. 1 | 昇任 | 経理部より |
| 情報 | 事務官 | 安原 恵理子 | 56. 7. 31 | 辞職 | |
| 情報 | 事務官 | 児玉 典子 | 56. 8. 1 | 採用 | |
| 天文 | 用務員 | 今成 津 | 56. 9. 30 | 辞職 | |
| 化学 | 事務官 | 片桐 百合子 | 56. 10. 3 | 辞職 | |
| 事務 | 人事掛主任 | 山口 泰教 | 56. 7. 1 | 昇任 | 人事掛より |
| 物理 | 教務職員 | 沼尾 登志男 | 56. 10. 15 | 休職 | 56. 10. 15 ～ 57. 10. 14 |

評議員の交代

| | | | |
|-----|-----------|--|------|
| (新) | 田村一郎教授(数) | 56. 10. 12 ~ 58. 10. 11 | 任期2年 |
| (旧) | 吉川虎雄教授(理) | 54. 4. 1 ~ 54. 10. 11 54. 10. 12 ~ 56. 10. 11 | 任期満了 |

教務委員会委員の一部交代

教務委員会では、10月1日付けで一部委員の交代があった。今期の委員長及び委員は次のとおりである。

| | | | |
|-----|-----------|----|-----------|
| 委員長 | 飯田 修一(物) | 委員 | 尾崎 洋二(天) |
| 委員 | 落合 卓四郎(数) | 〃 | 〇井上 康男(生) |
| 〃 | 佐藤 雅彦(情) | 〃 | 〇高橋 景一(動) |
| | | 〃 | 〇武田 弘(鉱) |

注〇印は新任の委員(任期2年)である。

外国人客員研究員

| 所属 | 受入れ教官 | 国籍 | 氏名 | 現職 | 研究期間 | 備考 |
|----|-------|--------------|-------------------------------------|-----------------------|---------------------------|---------------------------------------|
| 地質 | 島崎助教授 | 大韓民国 | 李 暎 成 | ソウル大学校師範大 学 副教授 | 56. 7. 16 } 56. 8. 15 | 日本学術振興会 科学者交流事業 |
| 化学 | 原口助教授 | タイ国 | Tasnee Attanandana | カセサート大学 助教授 | 56. 9. 10 } 56. 10. 24 | 日本学術振興会 東南アジア諸国 学術交流事業 |
| 化学 | 朽津教授 | ポーランド国 | Marek J. Wojcik | ヤギイロニアン大学 講師 | 56. 7. 7 } 56. 8. 8 | 日本化学会等 |
| 化学 | 不破教授 | アメリカ | J. D. Winefordner | フロリダ大学化学科 教授 | 56. 7. 20 } 56. 10. 10 | 日本学術振興会 |
| 地物 | 岸保教授 | エジプト | Abdel Rehim Imamm Bayoumi | カイロ大学理学部 教授 | 56. 8. 3 } 56. 9. 1 | 外国人受託研修 員 |
| 地物 | 岸保教授 | エジプト | EL-SA YED Mohamed Abdelrahman | カイロ大学理学部 講師 | 56. 8. 3 } 56. 9. 1 | 外国人受託研修 員 |
| 化学 | 不破教授 | カナダ | C. L. Chakrabarti | カールトン大学化学 科 教授 | 56. 8. 31 } 56. 9. 12 | 日本学術振興会 科学者交流事業 |
| 化学 | 不破教授 | カナダ | J. C. Vanloon | トロント大学地質化 学科 教授 | 56. 9. 1 } 56. 9. 30 | 日本学術振興会 科学者交流事業 |
| 数学 | 服部教授 | 日本 | 小林 昭 七 | カルフォルニア大学 教授 | 56. 9. 25 } 56. 12. 24 | 日本学術振興会 外国人招へい研 究員 |
| 物理 | 中井助教授 | フランス | J. C. Falvre | CEN Saclay 研究 員 | 57. 2. 1 } 58. 1. 31 | サクレー研究所 (フランス) 東大・高エネル ギー研究所 |
| 物理 | 岸保教授 | 中華人民 共和国 | 朱 抱 真 | 中国科学院大気物理 学研究所 研究員 | 56. 9. 15 } 56. 9. 27 | 日本学術振興会 科学者交流事業 |
| 情報 | 後藤教授 | ハンガリ ー | Endre Hujber | ハンガリー応用シス テム分析教育局 | 56. 10. 8 } 56. 10. 29 | 日本学術振興会 科学者交流事業 |
| 植物 | 田沢教授 | ドイツ連 邦共和国 | H. R. Luhring | チュービンゲン大学 | 57. 1. 10 } 58. 1. 9 | 日本学術振興会 若手研究者招致 事業 |

東京大学名誉教授の称号授与

56. 5. 19

定 永 両 一
霜 田 光 一

藤 原 鎮 男
竹 内 均

栗 原 五 郎

東京大学職員の永年勤続表彰

天文学科 今 成 津 殿

56. 9. 30 停年による退職に際し、表彰され、記念品が贈られた。

海 外 渡 航 者

(7 月)

| 所属 | 官職 | 氏 名 | 渡 航 先 国 | 渡航期間 | 渡 航 目 的 |
|-----|-----|---------|----------------------|---------------------|---|
| 化 学 | 助 手 | 浅 見 真 年 | アメリカ合衆国 | 7. 5~7. 13 | 日米シンポジウム「不斉の化学反応とプロセス」出席のため |
| 素粒子 | 助教授 | 山 田 作 衛 | ドイツ連邦共和国 | 7. 10~ 58. 7. 9 | 国際協同実験、電子・陽電子衝突実験のため |
| 地物研 | 教 授 | 福 島 直 | カナダ、連合王国、ドイツ連邦共和国 | 7. 23~8. 22 | 国際則地学・地球物理学連合執行委員会、国際地球電磁気学、超高層大気物理学協会学術総会出席のため |
| 情 報 | 教 授 | 国 井 利 泰 | アメリカ合衆国 | 7. 4~8. 21 | コンピュータグラフィックスに関する共同研究及び研究討論並びにコンピュータグラフィックス国際会議、コンピュータ・ソフトウェア国際会議論文委員会出席のため |
| 物 理 | 教 授 | 上 村 洸 | イタリア、ドイツ連邦共和国 | 7. 3~7. 26 | 「層間化合物の物理」国際会議、ルミネッセンス国際会議出席及び開発途上国学者指導のため |
| 物 理 | 助 手 | 岩 佐 泉 | スイス、ドイツ連邦共和国 | 7. 2~7. 16 | 固体中の内部摩擦と超音波吸収に関する国際会議出席及び固体物理学に関する研究連絡のため |
| 人 類 | 助教授 | 西 田 利 貞 | タンザニア連合共和国、連合王国、フランス | 7. 22~ 57. 1. 21 | アフリカ大型類人猿の比較研究のため |
| 化 学 | 助 手 | 鈴 木 薫 | アメリカ合衆国 | 7. 13~8. 19 | 準安定希ガス原子と気相及び凝縮相分子間のエネルギー移動過程に関する共同研究実施並びに第12回電子原子衝突物理学国際会議出席のため |

| 所属 | 官職 | 氏名 | 渡航先国 | 渡航期間 | 渡航目的 |
|-----|-----|------|---|------------|---|
| 化学 | 教授 | 田丸謙二 | 中華人民共和国、フランス、ベルギー、ハンガリー、ユーゴスラビア、オランダ、連合王国、ドイツ連邦共和国、ソビエト連邦 | 7.29~10.9 | 固体触媒作用の機構の研究及び国際純正応用化学連合総会、ヨーロッパ触媒化学会出席並びに触媒化学に関する研究連絡のため |
| 化学 | 教授 | 朽津耕三 | アメリカ合衆国 | 7.21~7.27 | 「分子衝突力学」に関するシンポジウム出席のため |
| 植物園 | 助手 | 邑田仁 | 中華人民共和国 | 7.27~8.4 | 植物分類学の資料収集のため |
| 地理 | 助手 | 池田安隆 | 台湾 | 7.14~7.27 | 地形学に関する調査及び共同研究打合せのため |
| 動物 | 助教授 | 代谷次夫 | アメリカ合衆国 | 7.6~9.5 | 放射線生物学に関する研究調査のため |
| 物理 | 教授 | 山崎敏光 | フランス、スイス、ドイツ連邦共和国 | 7.6~7.29 | 第9回高エネルギー物理と原子核構造国際会議出席及び原子核物理学に関する研究連絡のため |
| 化学 | 助教授 | 近藤保 | アメリカ合衆国 | 7.5~8.20 | 準安定希ガス原子と気相及び凝縮相分子間のエネルギー移動過程に関する共同研究実施及び層間化合物の物理に関する国際会議並びに原子衝突に関する国際会議出席のため |
| 植物 | 助手 | 原山重明 | アメリカ合衆国 | 7.20~10.10 | 光合成細菌ロドシュールドムナス・スフェロイデスの遺伝子解析研究のため |
| 物理 | 助教授 | 長澤信方 | ドイツ連邦共和国、ドイツ民主共和国 | 7.17~8.1 | 1981年ルミネッセンス国際会議出席及び光学物理学に関する研究連絡のため |
| 生化 | 教授 | 岡田吉美 | フランス | 7.31~8.9 | 第5回国際ウイルス学会出席のため |
| 地物研 | 助手 | 林幹治 | カナダ、連合王国 | 7.15~8.16 | 脈動型オーロラの物理機構の研究実施のため |
| 物理 | 教授 | 二宮敏行 | シンガポール | 7.20~7.24 | シンガポールにおける自然科学分野学術事情調査実施のため |
| 地物研 | 助教授 | 國分征 | カナダ、連合王国 | 7.15~8.16 | 脈動型オーロラの物理機構の研究のため |
| 情報 | 教授 | 後藤英一 | シンガポール | 7.20~7.24 | シンガポールにおける自然科学分野学術事情調査実施のため |
| 生化 | 講師 | 大野哮司 | フランス、スイス、ドイツ連邦共和国、ベルギー | 7.31~8.19 | 第5回国際ウイルス学会出席及び植物細胞分子生物学に関する研究連絡のため |
| 地物研 | 助教授 | 飯島健 | 連合王国、デンマーク | 7.28~8.19 | MAGSAT衛星資料解析に関する打合せ及びIAGA国際会議出席のため |

(8 月)

| | | | | | |
|----|----|-----|---------|----------|-----------------|
| 地理 | 教授 | 阪口豊 | 中華人民共和国 | 8.1~8.15 | 泥炭地学に関する調査研究のため |
|----|----|-----|---------|----------|-----------------|

| 所属 | 官職 | 氏名 | 渡航先国 | 渡航期間 | 渡航目的 |
|-----|-----|------|---------------|-----------------|---|
| 化学 | 助手 | 内藤周式 | カナダ | 8. 7~8. 22 | 第10回有機金属国際会議出席及び触媒化学に関する研究調査のため |
| 鉱物 | 助手 | 山中高光 | カナダ, アメリカ合衆国 | 8. 10.~8. 29 | 第12回国際結晶学連合会議出席及び鉱物学に関する研究連絡のため |
| 物理 | 助手 | 梶田晃示 | アメリカ合衆国 | 8. 12~9. 6 | 第16回低温物理学国際会議並びに第4回二次元系の電子物性に関する国際会議出席及び低温物性に関する研究連絡のため |
| 情報 | 教授 | 山田尚勇 | アメリカ合衆国 | 8. 2~9. 3 | 人工知能の応用に関する共同研究並びに情報科学に関する研究連絡のため |
| 素粒子 | 助手 | 蓑輪真 | ドイツ連邦共和国 | 8. 1~58. 7. 31 | 国際協同実験, 電子・陽電子衝突実験のため |
| 物理 | 助教授 | 小林俊一 | アメリカ合衆国 | 8. 17~8. 26 | 第16回低温物理学国際会議出席のため |
| 生化 | 教授 | 酒井彦一 | アメリカ合衆国 | 8. 29~9. 5 | 興奮性細胞の構造と機能に関する国際会議出席のため |
| 地物 | 教授 | 小嶋稔 | 連合王国 | 8. 1~8. 19 | 国際地球電気磁気学協会第4回科学会議出席のため |
| 天文 | 教授 | 高倉達雄 | アメリカ合衆国 | 8. 9~8. 20 | 国際電波科学連合20回総会出席のため |
| 化学 | 教授 | 富永健 | アメリカ合衆国 | 8. 20~8. 31 | アメリカ化学会第182年会出席及び放射化学に関する研究調査のため |
| 天文 | 助手 | 柴橋博資 | ソビエト連邦, ベルギー | 8. 30~57. 9. 9 | 国際天文学連合コロキウム「太陽と恒星の脈動の諸問題」出席及び星の非動径振動と安定性の研究のため |
| 植物 | 教授 | 佐伯敏郎 | オーストラリア | 8. 15~9. 7 | 第13回国際植物学会会議出席及び野外植物の学術調査のため |
| 生化 | 助教授 | 猪飼篤 | アメリカ合衆国, メキシコ | 8. 14~8. 31 | 蛋白質分子の自己形成セミナー準備会, 本会議出席及び第7回国際生物物理学会出席のため |
| 物理 | 助手 | 小野嘉之 | アメリカ合衆国 | 8. 14~8. 28 | 第16回低温物理国際会議出席及び固体物理学に関する研究のため |
| 鉱物 | 教授 | 竹内慶夫 | カナダ, アメリカ合衆国 | 8. 15~8. 30 | 第12回国際結晶学連合総会出席及び鉱物結晶学の研究調査のため |
| 地物 | 助手 | 宮田元靖 | アメリカ合衆国 | 8. 30~57. 2. 20 | 海洋物理学の共同研究のため |
| 化学 | 教授 | 向山光昭 | 中華人民共和国 | 8. 2~8. 7 | 新しい合成手法の開発と天然有機化合物の合成の研究実施のため |
| 物理 | 教授 | 山崎敏光 | ハンガリー | 8. 29~9. 7 | 核プローブによるアモルファス系の研究国際会議出席のため |
| 化学 | 教授 | 黒田晴雄 | アメリカ合衆国 | 8. 7~8. 27 | 分子構造設計の開発に関する共同研究実施及び1次元導体に関する研究連絡のため |
| 化学 | 助教授 | 池本勲 | アメリカ合衆国 | 8. 1~8. 20 | 分子構造設計の開発に関する共同研究実施のため |

| 所属 | 官職 | 氏名 | 渡航先国 | 渡航期間 | 渡航目的 |
|----|-----|--------|-----------------------------------|---------------------|---|
| 情報 | 助教授 | 前川 守 | アメリカ合衆国 | 8. 22～ 57. 6. 15 | 情報科学に関する共同研究のため |
| 植物 | 教授 | 古谷 雅樹 | オーストラリア | 8. 18～8. 29 | 第13回国際植物学会出席のため |
| 物理 | 教授 | 和田 昭允 | アメリカ合衆国, メキシコ | 8. 14～8. 31 | 蛋白質分子の自己形成セミナー準備会, 本会議及び第7回国際生物物理学会議出席のため |
| 情報 | 教授 | 後藤 英一 | アメリカ合衆国 | 8. 2～8. 9 | 1981年度計算機学会シンポジウム「記号数式処理」出席のため |
| 化学 | 教授 | 朽津 耕三 | カナダ, ベルギー, ドイツ連邦共和国 | 8. 14～9. 7 | 国際結晶学連合理事会, 第28回IUPAC会議, 第12回国際結晶学連合総会, 第31回IUPAC総会出席及び物理化学の研究のため |
| 植物 | 助教授 | 駒嶺 穆 | オーストラリア, シンガポール, インドネシア | 8. 18～9. 12 | 第13回国際植物学会会議出席及び植物生理学に関する研究連絡のため |
| 物理 | 助手 | 岩佐 泉 | アメリカ合衆国 | 8. 17～9. 6 | 第16回低温物理国際会議及びフォノン物理国際会議出席並びに固体物理学の研究連絡のため |
| 数学 | 助教授 | 塩田 徹治 | アメリカ合衆国 | 8. 28 ～9. 20 | 「フェルマーの大定理に関連する整数論の最近の傾向に関する会議」参加及び代数幾何学に関する研究調査のため |
| 物理 | 助教授 | 江口 徹 | ドイツ連邦共和国 | 8. 22～9. 12 | 第10回高エネルギー電子, 光子相互作用国際会議及び研究集会「素粒子物理学と統計物理学の構造要素」出席のため |
| 植物 | 助手 | 新免 輝男 | ドイツ連邦共和国, 連合王国 | 8.27～11. 7 | 植物細胞膜の生物物理学的研究のため |
| 地物 | 教授 | 岸保 勘三郎 | ドイツ連邦共和国 | 8. 15～9. 1 | 第3回国際気象学及び大気物理学協会学術総会出席のため |
| 鉱物 | 助教授 | 武田 弘 | スイス, 連合王国, ドイツ連邦共和国 | 8. 14～8. 26 | 国際隕石学会第44回年会, 評議員会出席及び隕石鉱物に関する研究調査のため |
| 物理 | 教授 | 山口 嘉夫 | ドイツ連邦共和国, フランス | 8. 22～9. 5 | 高エネルギーにおける軽粒子と光子の相互作用に関する国際シンポジウム並びに第7回国際純粋応用物理学連合総会出席のため |
| 物理 | 教授 | 植村 泰忠 | カナダ, オーストリア, アメリカ合衆国, ドイツ連邦共和国 | 8. 14～9. 21 | 第4回二次元電子系物理学国際会議, 狭いバンドギャップ半導体国際会議, 低温物理学国際会議出席並びに半導体物理学の研究連絡のため |
| 地理 | 助教授 | 小堀 巖 | ニジェール, オートボルタ | 8. 30～9. 15 | 国際半乾燥熱帯作物研究所理事会出席及び人類生態学に関する研究連絡のため |
| 物理 | 助教授 | 若林 健之 | メキシコ, アメリカ合衆国 | 8. 20～9. 6 | 第7回国際生物物理学会出席及び物理学に関する研究連絡のため |

(9 月)

| 所属 | 官職 | 氏名 | 渡航先国 | 渡航期間 | 渡航目的 |
|----|-----|--------|-------------------|---------------------|--|
| 臨海 | 助手 | 雨宮昭南 | アメリカ合衆国 | 9. 3~9. 28 | ウニ及び海産無脊椎動物卵の受精並びに初期発生の過程と機構に関する日米科学協力セミナー出席及び発生生物学に関する研究連絡のため |
| 物理 | 教授 | 猪木慶治 | ソビエト連邦 | 9. 14~9. 21 | 第6回高エネルギー物理問題国際研究集会出席のため |
| 数学 | 助手 | 川又雄二郎 | アメリカ合衆国 | 9. 1~ 57. 8. 21 | 代数幾何学の研究のため |
| 動物 | 助手 | 井尻憲一 | 連合王国 | 9. 26~ 57. 10. 5 | 放射線生物学に関する研究のため |
| 地理 | 助手 | 池田安隆 | ニュージーランド | 9. 14~ 57. 1. 9 | ニュージーランド北島の第四紀地殻変動調査のため |
| 物理 | 教授 | 有馬朗人 | ドイツ連邦共和国 | 9. 3~9. 19 | 原子核におけるクラスター現象に関する国際会議出席及び原子核に関する研究のため |
| 動物 | 助手 | 馬場昭次 | アメリカ合衆国 | 9. 8~9. 17 | 繊毛運動の機構と制御に関する国際会議出席及び動物生理学に関する研究連絡のため |
| 動物 | 教授 | 高橋景一 | アメリカ合衆国 | 9. 7~9. 16 | 繊毛運動の機構と制御に関する国際集会参加及び動物生理学に関する研究連絡のため |
| 動物 | 助手 | 真行寺千佳子 | アメリカ合衆国 | 9. 8~9. 16 | 繊毛運動の機構と制御に関する国際集会出席及び細胞生理学に関する研究連絡のため |
| 地物 | 教授 | 小嶋稔 | ソビエト連邦 | 9. 23~10. 3 | 希ガスの地球化学研究に関する研究連絡のため |
| 物理 | 教授 | 有馬朗人 | スペイン, イタリア | 9. 26~10. 11 | 原子核に関する国際集会出席並びに原子核物理に関する研究連絡のため |
| 天文 | 助手 | 尾中敬 | アメリカ合衆国 | 9. 17~10. 18 | 天文学に関する調査研究のため |
| 化学 | 教授 | 不破敬一郎 | 大韓民国 | 9. 9~9. 14 | ソウル国際分光学会出席及び無機化学に関する研究連絡のため |
| 物理 | 助教授 | 釜江常好 | ドイツ連邦共和国, アメリカ合衆国 | 9. 30~10. 25 | 国際会議「HERAの見地にたった討論会を兼ねたEP衝突装置における物理学」出席及び日米科学協力事業「電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験」のため |

(10 月)

| | | | | | |
|----|----|-------|----------|---------------|-----------------------------------|
| 地理 | 教授 | 吉川虎雄 | ニュージーランド | 10. 31~12. 20 | ニュージーランド北島の第四紀地殻変動調査のため |
| 物理 | 教授 | 山口嘉夫 | ソビエト連邦 | 10. 19~10. 24 | ICFA (将来の加速器に関する国際委員会) 第6回会議出席のため |
| 地物 | 教授 | 岸保勘三郎 | インドネシア | 10. 23~10. 31 | モンスーン観測実験に関する科学的成果国際会議出席のため |

| 所属 | 官職 | 氏名 | 渡航先国 | 渡航期間 | 渡航目的 |
|-----|-----|------|--|-------------|---|
| 人類 | 教授 | 尾本恵市 | フィリピン | 10.12~10.25 | 人類学に関する研究連絡のため |
| 地理 | 講師 | 米倉伸之 | ニュージーランド, 西サモア共和国, フィジー, ナウル共和国, アメリカ合衆国 | 10.10~11.7 | 中部太平洋における海面変動とテクトニクス予備調査のため |
| 天文 | 助教授 | 小平桂一 | アメリカ合衆国 | 10.6~10.18 | 国際天文学連合コロキウムNo.68 「球状星団の天体物理パラメータ」 出席及び恒星天文学に関する研究 連絡のため |
| 地物 | 助手 | 新田 勅 | インドネシア | 10.24~10.31 | 「モンスーン実験」に関する国際 会議出席のため |
| 情報 | 助教授 | 佐藤雅彦 | オランダ, 連合 王国 | 10.24~11.3 | 算法言語国際会議出席及び情報科 学の研究のため |
| 物理 | 助手 | 坪野公夫 | アメリカ合衆国 | 10.10~10.25 | 重力派の検出に関する共同研究実 施のため |
| 植物園 | 助手 | 邑田 仁 | 中華人民共和国 | 10.18~10.26 | 植物分類学に関する資料収集のため |
| 情報 | 教授 | 米田信夫 | オランダ, 連合 王国, アメリカ 合衆国 | 10.24~11.12 | 国際情報処理連合「算法言語」国 際シンポジウム出席及びソフトウ ェア工学に関する調査研究のため |
| 化学 | 教授 | 向山光昭 | アメリカ合衆国 | 10.16~11.2 | 有機合成化学に関する調査研究の ため |
| 化学 | 助教授 | 原口紘炏 | タイ | 10.13~12.11 | 熱帯における水田の高度利用と窒 素循環の研究のため |
| 物理 | 教授 | 飯田修一 | アメリカ合衆国 | 10.31~11.16 | 第27回磁気学及び磁性材料国際会 議出席並びに磁気学に関する研究 連絡のため |
| 化学 | 教授 | 大木道則 | アメリカ合衆国 | 10.27~11.8 | 大学教育における化学の基礎, 市 民としての最低必要原理セミナー 本会議出席並びに化学教育事情研 究のため |

毎月1日は

「省エネルギー」

の日です。

編 集 後 記

原稿が集まらなければ、それなりのうすい広報を出すことにしているので、この編集という作業は言ってみれば気楽なものである。しかし、表紙には苦労させられる。とくに前号の表紙は、かげ

のうすいものであった。本来は、本文の研究の先端がわかるような表紙がよいのだろうが、それが表紙になりえないのが、数学の特質なのであろう。今回は、微分の表紙でした。 (い)

*
* ●泥棒がねらっている (盗難注意) /
*
* 本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで
* 泥棒 (盗難) の被害にあっています。あなたのちょっとした
* 注意で被害をくいとめられます。
*
* ~最近被害続出~
*

あなたです!

火事を出すのも

防ぐのも

編集:

| | | |
|--------------|----|------|
| 飯 高 茂 (数学) | 内線 | 4053 |
| 矢 崎 紘 一 (物理) | | 4123 |
| 小 平 桂 一 (天文) | | 4258 |
| 露 木 孝 彦 (化学) | | 4357 |
| 尾 本 恵 市 (人類) | | 4482 |
